

## 雑談における母語話者と非母語話者の笑いの使用傾向の分析 — 『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』 を用いて —

宇佐美まゆみ（国立国語研究所）・張未未（早稲田大学大学院生）

### 1. はじめに

『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』（以下、「BTSJ 日本語自然会話コーパス」と略する）とは、シナリオのない自発的な自然会話を、母語場面、接触場面の初対面会話、友人同士の会話、教師と学生の論文指導場面等のサブ・グループごとに、年齢や性を条件統制して収集した会話データをまとめたもので、1 会話 20 分程度の会話、333 会話（約 79 時間）が収録されている。

本コーパスに収録された会話は、サブ・グループごとに、収集の目的や、会話の条件が統制されているため、グループごとの目的・条件を確認し、研究目的に応じて、話者の属性（年齢、性別等）や対話相手との関係などの話者の話し方に大きな影響を与える社会的要因を考慮に入れた分析が可能である。現在も拡充中<sup>1</sup>であるが、2018 年版では、コーパス収録会話の半数を占める学生話者の母語場面と接触場面の同等の相手との初対面雑談、友人同士の雑談の全 155 会話を、「コア会話」<sup>2</sup>と名付けている。大量データの量的分析には、「コア会話」のみを使うことを推奨している。本稿では、「コア会話」を利用した特徴分析の一例として、日常会話で頻繁に生じる「笑い」の使用実態をまとめる。

日本語における笑いに関する研究としては、笑いの機能の分類を試みたものやその分類に基づいて実証的研究を行なった早川（2000, 2001）などがある。早川（2001）は、親疎・上下関係によってジャンル化される会話の間で機能別の笑いの分布に特徴があると主張している。一方、接触場面における母語話者と非母語話者の笑いの違いに着目した英語会話の研究もなされており、英語非母語話者は英語母語話者と異なり、特に面白いとは思えない通常の陳述のあとに笑いを添えたり、それに対して笑いで応える場合があることなどが報告されている（村田・堀 2007）。本稿では、まずは、「BTSJ 日本語自然会話コーパス」の「コア会話」における笑いの全体的使用傾向を示す。また、さらに一定条件を満たす接触場面の会話 16 会話を抽出し、母語話者と非母語話者の笑いの使用傾向の特徴を分析する。

### 2. 方法

「BTSJ 日本語自然会話コーパス」を利用して、接触場面における母語話者と非母語話者の笑いを、「言語社会心理学的アプローチ」（宇佐美 1999）、「総合的会話分析」（宇佐美 2008, 2015）の方法論に基づき分析する。グローバルの観点からの分析としては、「コア会話」の笑いの全体的使用傾向を定量的にまとめ、ローカルの観点からは、接触場面における母語話者と非母語話者の笑いのタイプに違いがあるのかについて定性的にも考察する。

#### 2.1 定量的分析に用いるデータと方法

「コア会話」は、大きくは、初対面会話と友人会話（それぞれ男性同士、女性同士、男女）に分かれるが、まずは、その中の同性同士の会話における笑いの特徴を明らかにするために、男女の会話以外の 143 会話（母語場面と接触場面における同等の相手との初対面雑談（男同士、女同士）69 会話、友人同士の雑談（男同士、女同士）74 会話）を分析対象とした。

『基本的な文字化の原則（BTSJ）2019 年改訂版』（宇佐美 2020）では、当該話者自身の笑いと、相手が発話しているときの笑いを区別して文字化している。そのことを生かし、各条件統制下の会話グループにおける笑いを、話者の「①発話時の笑い」と「②相手発話時の笑い」に分けて、それぞれの頻度と総発話文数に占める割合、各会話における笑いの話者ごとの割合を算出した。「<笑い>」や「<笑いながら>」などで表示されているものを「①発話時の笑い」とし、「<

<sup>1</sup> 『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2020 年版』（377 会話、約 92 時間を 2020 年 3 月末に公開する予定である。

<sup>2</sup> 「コア会話」とは、「BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版」の中の会話のジャンル（雑談）、場面（母語場面／接触場面）、話者の社会的属性（学生）、話者同士の面識の度合い（初対面／既知（友人）、話者関係（対同等）、性別（男男／女女／男女）に条件を統制して抽出した 155 会話である。

笑い>)」を「②相手発話時の笑い」とした。「<2人で笑い>」は、「①」「②」の両方でカウントした。また、1発話文中に笑いが複数回出現した場合、複数回とカウントした。

## 2.2 定性的分析に用いるデータと方法

母語話者と非母語話者の初対面会話と友人会話における笑いの機能の特徴を分析するため、音声付きの会話を抽出し、定性的分析を行った。非母語話者の日本語レベルも考慮に入れ、会話数の最も多い上級話者の初対面会話8会話に合わせて、友人同士の15会話から無作為に8会話を抽出し、比較することにした。選出された全16会話<sup>3</sup>の総会話時間は5時間20分48秒で、総発話文数は6622である。

この16会話における母語話者、非母語話者の「①発話時の笑い」を対象に、以下の早川(2000)による笑いの分類に倣い、大きくは、笑いのタイプを3つ(下位項目を入れると8つ)に分けて、コーディングを行なった。

### 早川(2000)による笑いの分類

- A. 仲間づくりの「笑い」= 談話促進の「笑い」
  - A-1. 自分の楽しいと思うことに付加され、談話参加を促す「笑い」= 話題の共有期待の「笑い」
  - A-2. 相手の考えを共有し、会話に参加する「笑い」= 共有表明の「笑い」
  - A-3. 共通の背景を確認する「笑い」= 共通認識確認の「笑い」
- B. バランスをとるための「笑い」= 緊張緩和の「笑い」
  - B-1. 自分の領域に属する内容に付加された「笑い」= 恥または照れによる「笑い」
  - B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された「笑い」= 厚かましきによる「笑い」
  - B-3. 挨拶に付加された「笑い」= 儀礼的「笑い」
- C. 覆い隠すための「笑い」= 会話継続の「笑い」
  - C-1. 言いたくないことを隠すための「笑い」= ごまかしの「笑い」
  - C-2. 反応の仕方がわからないための「笑い」= とりあえずの「笑い」

以下に、コーディングの具体例<sup>4</sup>を示す。

- 例(1) —1 A <笑い> (A-1) もうホントにいい先生がいるのよねえ。  
 —2 B ふーん  
 —3 A それで、もう、うちの子供なんか、恋をしてる程大好きで、「だいしゅき、だいしゅき」とかゆっ <笑い> (A-1)  
 —4 B <笑い> (A-2) かわいー <笑い> (A-2)
- 例(2) —1 A でも、わたしなんか、なんか、あの、よくあるじゃないですか。お見合いの時に聞かれる、あれのような心境になって。 <笑い> (A-3)  
 —2 B 興信所みたいな。 <笑い> (A-3)
- 例(3) —1 A Bちゃん、まだ22歳だっけ。  
 —2 B 来年で <笑い> (B-1)、23で一す。 <笑い> (B-1)
- 例(4) —1 A じゃあ、この、点滅ってゆうふうにごー、ファジーな表現がいいんじゃないですか。 <笑いながら> (B-2)
- 例(5) —1 A あーそうですか。有り難うございます。 <笑いながら> (B-3)
- 例(6) —1 A あるんですよ。いろいろと。  
 —2 B はあ  
 —3 A <笑いながら> (C-1) いろいろと・・・
- 例(7) —1 A だからそれがすけてんのよ。  
 —2 B <笑い> (C-2)  
 —3 A もう、パンツ見える？

## 3. 結果と考察

以下に、定量的分析、定性的分析の結果と考察を記す。

### 3.1 定量的分析

「コア会話」の中の同性同士の全143会話(計67,772発話文)中、12,400(18.30%)の笑いが確認された。そのうち、「①発話時の笑い」が9,450(13.94%)、「②相手発話時の笑い」が2,950(4.35%)で、「①」と「②」が同時に発生するケースが1,196(1.76%)あった。

以下、母語場面、接触場面別に、「コア会話」中の同性同士の会話の集計結果を示していく。表1は、母語場面の初対面、友人同士の会話における笑いの頻度と各会話の総発話文数に占める

<sup>3</sup> 初対面8会話の通し番号は279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286であり、友人同士8会話の通し番号は142, 143, 144, 324, 325, 326, 327, 328である。

<sup>4</sup> 用例は、早川(2001)の一部を改変したものである。

割合を集計した結果である。

表 1：コア会話中母語場面の初対面，友人同士の 86 会話における  
母語話者の笑いの頻度と会話の総発話文数に占める割合

場面	初対面(32 会話)				友人(54 会話)			
	①発話時の笑 い： 頻度(割合%)	②相手発話時 の笑い： 頻度(割合%)	会話の 総発話 文数	会 話 総 数	①発話時の笑 い： 頻度(割合%)	②相手発話時 の笑い： 頻度(割合%)	会話の 総発話 文数	会 話 総 数
男同士	58 (4.07)	19 (1.33)	1425	4	831 (9.01)	296 (3.21)	9227	16
女同士	924 (7.58)	217 (1.78)	12187	28	1525 (7.46)	424 (2.07)	20449	38

注：母語場面における母語話者 1 人あたりの笑いの頻度と割合を示すため，会話参加者 2 人の笑いの頻度を 2 で割り，四捨五入した結果である。

表 1 からわかるように，母語場面においては，女性は，初対面話者，友人話者のいずれの相手に対しても同程度に笑うのに対して，男性は，初対面相手との会話における笑いと，友人との会話における笑いの頻度が大きく異なり，友人との会話における笑いが「①発話時の笑い」「②相手発話時の笑い」ともに初対面会話における笑いよりも多かった。

次に，接触場面の初対面，友人同士の会話における母語話者，非母語話者の笑いの頻度と各会話の総発話文数に占める割合を集計し，その結果を表 2 に示す。

表 2：コア会話中接触場面の初対面，友人同士の 57 会話における  
母語話者と非母語話者の笑いの頻度と会話の総発話文数に占める割合

場面	初対面(37 会話)				友人(20 会話)			
	①発話時の笑 い： 頻度(割合%)	②相手発話時 の笑い： 頻度(割合%)	会話の 総 発話 文数	会 話 総 数	①発話時の笑 い： 頻度(割合%)	②相手発話時 の笑い： 頻度(割合%)	会話の 総 発話 文数	会 話 総 数
男同士(母)	225 (5.72)	32 (0.81)	3934	7	—	—	—	—
男同士(非)	257 (6.53)	105 (2.67)			—	—	—	—
女同士(母)	771 (6.33)	270 (2.22)	12189	30	350 (4.19)	149 (1.78)	8361	20
女同士(非)	764 (6.27)	331 (2.72)			410 (4.90)	153 (1.83)		

注：「コア会話」には，接触場面における男性友人同士の会話がないため，友人，男同士(母)／男同士(非)の欄は—とした。

表 1 と表 2 からわかるように，母語場面における初対面会話の「①発話時の笑い」は，女性のほうが 2 倍近い割合で多いが，友人同士の会話における笑いは，逆に，男性のほうが若干多くなっている。男性母語話者は，母語場面では，初対面の相手との会話より，友人との会話において 2 倍近くの割合で笑っている。また，接触場面でのほうが，母語場面よりも，「①発話時の笑い」が多い。しかし，接触場面における男性母語話者の笑いの割合は，非母語話者の笑いの割合より少ない。一方，男性とは異なり，母語場面の女性話者は，初対面会話，友人会話における笑いの割合に大差なく，どちらも最も高い割合を示している。しかし，接触場面においては，母語場面よりも，笑いの割合は少なくなる。特に，友人との会話においては，4.19%と，母語話者男性の初対面会話における 4.07%に次いで，「①発話時の笑い」の使用が少ない。

「②相手の発話時の笑い」については，母語場面では，男女ともに，友人との会話のほうが，初対面会話よりも多い。しかし，接触場面における女性話者は，友人同士の会話より初対面会話においてのほうが，母語話者，非母語話者ともに多くなっており，初対面の相手との会話をより円滑にしようとしていることが窺える。

次に，表 3-1，表 3-2 に，接触場面の初対面，友人の会話における「①発話時の笑い」「②相手発話時の笑い」それぞれの母語話者と非母語話者の頻度と割合を示す。

表 3-1：コア会話中接触場面における「①発話時の笑い」「②相手発話時の笑い」  
それぞれの母語話者と非母語話者の頻度と割合（初対面 37 会話）

場面	初対面(37 会話)			
	男同士：頻度(割合%)		女同士：頻度(割合%)	
	①発話時の笑い	②相手発話時の笑い	①発話時の笑い	②相手発話時の笑い
母	225(46.68)	32(23.36)	771(50.22)	270(44.93)
非	257(53.32)	105(76.64)	764(49.77)	331(55.07)
合計	482(100.00)	137(100.00)	1535(100.00)	601(100.00)

表 3-2 : コア会話中接触場面における「①発話時の笑い」「②相手発話時の笑い」  
それぞれの母語話者と非母語話者の頻度と割合（友人 20 会話）

場面	友人(20 会話)			
	男同士：頻度(割合%)		女同士：頻度(割合%)	
	①発話時の笑い	②相手発話時の笑い	①発話時の笑い	②相手発話時の笑い
母	—	—	350(46.05)	149(49.34)
非	—	—	410(53.95)	153(50.66)
合計	—	—	760(100.00)	302(100.00)

注：「コア会話」には、接触場面における男性友人同士の会話がないため、男同士(母)/男同士(非)の欄は—となっている。

表 3-1 と表 3-2 から、接触場面においては、非母語話者のほうが、母語話者よりも多く笑うという傾向がわかる。初対面会話において、男性の場合は、「②相手発話時の笑い」が非母語話者のほうが 3 倍の割合で多く笑っている。一方、女性の場合は、初対面会話の場合、「①発話時の笑い」は、母語話者、非母語話者間にさほど違いは見られないが、「②相手発話時の笑い」は、非母語話者のほうが、母語話者よりも多い。それに対して、友人の場合、「②相手発話時の笑い」は、母語話者、非母語話者間に違いは見られないが、「①発話時の笑い」は、非母語話者のほうが、母語話者よりも多い。全体的には、接触場面においては、初対面会話、友人会話、男女を問わず、非母語話者のほうが母語話者よりも多く笑っており、会話を円滑に進めようとする努力が窺える結果となっている。

### 3.2 定性的分析

以下には、定性的分析にかかわる結果を示していく。

#### 3.2.1 接触場面の初対面会話、友人会話（女性同士）における母語話者と非母語話者の笑い

ここでは、2.2 に示したように、音声も考慮し、笑いのタイプをより質的に考察するために、接触場面における女性同士の初対面雑談 8 会話と友人雑談 8 会話を分析対象に絞り、早川（2000）の分類に倣ってコーディングを行った結果を示す。

以下の表 4 には、初対面、友人別に、「①発話時の笑い」と「②相手発話時の笑い」の頻度と会話の総発話文数に占める割合を示す。

表 4 : 接触場面、女性同士の会話における母語話者と非母語話者の  
「①発話時の笑い」「②相手発話時の笑い」の頻度と会話の総発話文数に占める割合

場面	初対面(8 会話)			友人(8 会話)		
	①発話時の笑い： 頻度(割合%)	②相手発話時の笑い： 頻度(割合%)	会話の 総発話 文数	①発話時の笑い： 頻度(割合%)	②相手発話時の笑い： 頻度(割合%)	会話の 総発話 文数
母	156(5.32)	50(1.71)	2931	129(3.49)	44(1.19)	3691
非	122(4.16)	53(1.81)		180(4.88)	49(1.33)	

表 2 と合わせてみると、定性的分析に用いられる女性同士による 16 会話は、初対面、友人ともに、コア会話とほぼ同様の傾向が見られたということがわかる。

次に、以下の表 5 に「①発話時の笑い」「②相手発話時の笑い」それぞれの母語話者、非母語話者の頻度と割合を示す。

表 5 : 接触場面、女性同士の会話における「①発話時の笑い」「②相手発話時の笑い」  
それぞれの母語話者、非母語話者の頻度と割合

場面	初対面(8 会話)：頻度(割合%)		友人(8 会話)：頻度(割合%)	
	①発話時の笑い	②相手発話時の笑い	①発話時の笑い	②相手発話時の笑い
母	156(56.12)	50(48.54)	129(41.75)	44(47.31)
非	122(43.88)	53(51.46)	180(58.25)	49(52.69)
合計	278(100.00)	103(100.00)	309(100.00)	93(100.00)

表 5 からわかるように、「①発話時の笑い」は、初対面会話において、母語話者のほうが非母語話者よりも多かった以外は、非母語話者の笑いが若干多くなっている。

#### 3.2.2 接触場面における母語話者と非母語話者の笑いのタイプ別集計結果

次の表 6 と表 7 に「①発話時の笑い」を早川（2000）による笑いの分類に倣ってコーディングした結果を、初対面、友人別に示す。

表 6：接触場面における「①発話時の笑い」の  
タイプ別頻度と「①発話時の笑い」全体に占める割合（初対面 8 会話）

話者	A. 談話促進： 頻度(割合%)			B. 緊張緩和： 頻度(割合%)			C. 会話継続： 頻度(割合%)		①発話時の 笑いの総数
	A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	
母	107(68.59) [58.79]			45(28.85) [56.25]			4(2.56) [25.00]		156(100.00) [56.12]
	51(32.69) [28.02]	52(33.33) [28.57]	4(2.56) [2.20]	33(21.15) [41.25]	5(3.21) [6.25]	7(4.49) [8.75]	—	4(2.56) [25.00]	
非	75(61.48) [41.21]			35(28.69) [43.75]			12(9.84) [75.00]		122(100.00) [43.88]
	34(27.87) [18.68]	37(30.33) [20.33]	4(3.28) [2.20]	20(16.39) [25.00]	9(7.38) [11.25]	6(4.92) [7.50]	1(0.82) [6.25]	11(9.02) [68.75]	
合計	182(65.47) [100.00]			80(28.78) [100.00]			16(5.76) [100.00]		278(100.00) [100.00]

注(1)：( )は、笑いのタイプ別の頻度と割合を示している。

注(2)：[ ]は、笑いの各機能ごとの母語話者、非母語話者の頻度と割合を示している。

表 7：接触場面における「①発話時の笑い」の  
タイプ別頻度と「①発話時の笑い」全体に占める割合（友人 8 会話）

話者	A. 談話促進： 頻度(割合%)			B. 緊張緩和： 頻度(割合%)			C. 会話継続： 頻度(割合%)		①発話時の 笑いの総数
	A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	
母	109(84.50) [46.00]			19(14.73) [27.54]			1(0.78) [33.33]		129(100.00) [41.75]
	59(45.74) [24.89]	40(31.01) [16.88]	10(7.75) [4.22]	10(7.75) [14.49]	6(4.65) [8.70]	3(2.33) [4.35]	1(0.78) [33.33]	—	
非	128(71.11) [54.00]			50(27.78) [72.46]			2(1.11) [66.67]		180(100.00) [58.25]
	76(42.22) [32.07]	43(23.89) [18.14]	9(5.00) [3.80]	32(17.78) [46.38]	16(8.89) [23.19]	2(1.11) [2.90]	—	2(1.11) [66.67]	
合計	237(76.70) [100.00]			69(22.33) [100.00]			3(0.97) [100.00]		309(100.00) [100.00]

注(1)：( )は、タイプ別の頻度と割合を示している。

注(2)：[ ]は、各機能の母語話者、非母語話者の笑いの頻度と割合を示している。

### 3.2.3 接触場面における母語話者と非母語話者の笑いのタイプ別事例

表 6 と表 7 の母語話者、非母語話者による笑いのタイプ別頻度と割合に注目する。初対面会話でも、友人会話でも、母語話者、非母語話者ともに、笑いのタイプは、「A. 談話促進」、「B. 緊張緩和」、「C. 会話継続」の順に多かった。母語話者は、友人同士の場面よりも、初対面のほうが全体的に笑いが多いが、初対面会話における母語話者と非母語話者を比べると、「A. 談話促進」、「B. 緊張緩和」は、母語話者の割合が高いが、「C. 会話継続」は、圧倒的に非母語話者のほうが多い。友人との会話を見ると、すべての機能において、非母語話者のほうが、多く笑っている。そのような中でも、母語話者が非母語話者より多く笑った、初対面会話「A. 談話促進」「B. 緊張緩和」の中から、「B-1. 恥または照れによる笑い」の例を、以下に示す。

#### 会話例 1：母語話者による「B-1. 恥または照れによる笑い」の例（初対面）

会話の 通し番 号	会話グ ループ 番号	ライ ン番 号	発話 文番 号	発話 文継 続	話者記号	会話相 手の話 者記号	発話内容
285	20	176	169	*	TFA012	JF137	##アルバイトやっていますか？。
285	20	177	170	*	JF137	TFA012	やっています。
285	20	178	171	*	TFA012	JF137	へ、どこ？。
285	20	179	172	*	JF137	TFA012	ワイルドブルーっていう...
285	20	180	173	*	TFA012	JF137	ワイドール？。
285	20	181	174	*	JF137	TFA012	ワイルドブルーっていう、うーっんと、今度つぶれるんですけど<笑い>。

母語話者 JF137 が相手の非母語話者 TFA012 にアルバイトのことを聞かれて、285 発話文で、今度つぶれると、緊張を緩和する機能を持つ照れ笑いをしながら話している。

一方で、非母語話者は、初対面会話「A. 談話促進」「B. 緊張緩和」以外では、すべて母語話者

よりも笑いが多かった。初対面会話と友人会話における各笑いのタイプによる大きな違いも見られなかったが、初対面では「A-1. 話題の共有期待の笑い」より「A-2. 共有表明の笑い」が多かったのに対して、友人会話では「A-1. 話題の共有期待の笑い」のほうが「A-2. 共有表明の笑い」より多かった。初対面の相手よりも、共有事項が多い友人との会話で、話題の共有表明が多くなることは、自然であろう。以下に、友人との会話における非母語話者の「A-1. 話題の共有期待の笑い」を会話例2として記す。

**会話例2：非母語話者による「A-1. 話題の共有期待の笑い」の例（友人）**

会話の通し番号	会話グループ番号	ライン番号	発話文番号	発話文継続	話者記号	会話相手の話者記号	発話内容
325	22	40	39	*	CFA007	JF177	<あの>{>}、何か、先生は、あの一、酔っ払っちゃって<笑い>。
325	22	41	40	*	JF177	CFA007	あ、そうなの?。
325	22	42	41	*	CFA007	JF177	でも、あの、まあ、普段で絶対、あの一、先生は言うわけないこと<笑いながら>いっぱい<言ってた>{<}。

40 発話文と 42 発話文で、非母語話者 CFA007 が笑いながら先生の酔っ払いの話をして、相手の母語話者 JF177 と話題を共有しようとしている。

次に、各機能の母語話者、非母語話者の笑いの頻度と割合に注目する。「A. 談話促進」と「B. 緊張緩和」の笑いともに、初対面では、非母語話者よりも母語話者のほうが多かったが、友人では、母語話者よりも非母語話者のほうが多かった。「B-2. 厚かましきによる笑い」においては、初対面、友人ともに、母語話者よりも非母語話者のほうが多かったというのが特徴である。

**会話例3：非母語話者による「B-2. 厚かましきによる笑い」の例（友人）**

会話の通し番号	会話グループ番号	ライン番号	発話文番号	発話文継続	話者記号	会話相手の話者記号	発話内容
325	22	597	577	*	CFA007	JF177	でも「JF177 苗字」さんも、英語のほうは<すごくうまいでしょう>{<}。
325	22	598	578	*	JF177	CFA007	<え、もう全然できない、できない>{>}できない。
325	22	599	579	*	CFA007	JF177	謙虚しちゃだめだよ<笑い>。
325	22	600	580	*	JF177	CFA007	違う、本当にできない、勉強しないと大変、大変。

発話文 579 では、非母語話者 CFA007 が相手の母語話者 JF177 の領域に入って、謙虚しないでと促している。

**4. おわりに**

発表では、母語話者と非母語話者の「笑い」の定性的分析結果を会話例とともに紹介する。

**【謝辞】**

本稿は、国立国語研究所「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブ・プロジェクト（リーダー：宇佐美まゆみ）、および JSPS 科研費 18H03581 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的分析」（研究代表者：宇佐美まゆみ）の成果の一部である。

**【引用文献】**

宇佐美まゆみ（1999）「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」『日本語学』18(11), 40-56, 明治書院

宇佐美まゆみ（2008）「相互作用と学習—ディスコース・ポライトネス理論の観点から」西原鈴子・西郡仁朗(編)『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』, 150-181, ひつじ書房

宇佐美まゆみ（2015）「『総合的会話分析』の趣旨と方法—量的分析と質的分析の必然的融合—」『日本語教育』162(0), 34-49, 日本語教育学会

宇佐美まゆみ（2020）「『基本的な文字化の原則（BTSJ）2019年改訂版』」宇佐美まゆみ(編)『自然会話分析への語用論的アプローチ』, 17-42, ひつじ書房

早川治子（2000）「相互行為としての『笑い』—自・他の領域に注目して—」『文学部紀要』14(1), 23-43, 文教大学文学部

早川治子（2001）「『笑い』の分類に基づく数量的分析」『文学部紀要』14(2), 1-24, 文教大学文学部

村田和代・堀素子（2007）「異文化間コミュニケーションにおける『笑い』の機能について」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』(9), 115-124, 龍谷大学国際社会文化研究所